

あしたの郊外

「取手アートプロジェクトの広報紙」

—— 郊外のまち茨城県取手市で、21年続くアートプロジェクト

.....2.....
食べて、つくる！
藝大食堂へようこそ



.....4.....
【対談】
半農半芸10年の旅
岩間賢×羽原康恵



FRESH BREAD



TODAY'S SPECIAL

第五号

TAKE FREE



Toride
IBARAKI



.....7.....
取手のひと
取手のしごと



.....8.....
たいけん美じゅつ場
オープン！

食べる芸術
応援できます



Illustration: Meo Ichihara

ただの学食じゃない、藝大食堂

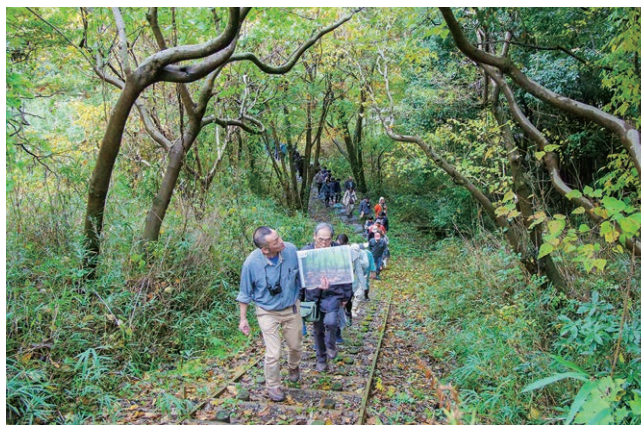
「みんなでつくる食堂」を目指して、プロジェクトがはじまった！取手市小文間の森のなか、芸術家やスタッフ、生産者や協力者が日々奔走する、おいしい、ここにしかない食堂づくり。日替わりランチもテーブルも、つくれるものは手づくりで。身体も表現も、日々口にすることでできている。ごはんを囲む窓の外では開墾だってはじまります。「食」を大黒柱に、自然とつながるこの場所は次の社会を切り拓く力を生み出すことができるでしょうか。さまざまな活動への扉がひらきます。

PROJECT

耕すプロジェクト

開設から約30年の間に、自然が大いに隆盛になってしまった藝大取手キャンパスの野外環境に手を入れていく「耕す人」チームが2019年秋に発足。まずは耕す下準備として、藝大食堂を取り囲む森の繁りすぎた樹木の伐採を進めています。

また2020年には芸術家と学生、地域の人がいっしょに育てる藝大ヤギプロジェクトが小沢剛研究室との連携で始動予定！近日、藝大取手校地で草をはむヤギの同居がはじまります。



←写真上|耕す活動後のひととき。ディレクター特製焼きおにぎりを囲んで写真下|取手校地を踏査した雑草学の専門家と歩いて植生を学ぶ



耕す

仲間募集します
若者もおいで！

耕す人たち

触れる

Interesting

よってらっしゃい
みてらっしゃい

笹岡由梨子(ジャイロ)

ショーケース&
ショーケース・イン・ザスクリーン

食堂のエントランスでは、使われなくなった食品サンプルケースがマイクロギャラリー「ショーケース」に変身して来客を迎えています。2019年度からは映像のショーケースも合わせてスタート。小沢剛(展示)と藤岡勇人(映像)によるキュレーションで、若手作家の活動を紹介し、各回の作品をテーマにした食のイベントも開催しています。



廣瀬祥大(屋久島から取手に旅行へ)

すごし方研究会

食べるだけじゃない、藝大食堂とその周辺での多様なすごし方を実践してみよう。年に一度の藝大取手校地オープンキャンパスへの参加や、芸術家の暮らしと表現の密接なつながりを体感する「超・くらし研究会」、好きなことを持ちよってすごす「すごす日Fes」などいろんな切り口で試しています。



井野団地ではおなじみの「とくいの銀行(深澤孝史)」が食堂にも

藝大ファクトリーラボ×
TAP《半農半芸》0to1プログラム

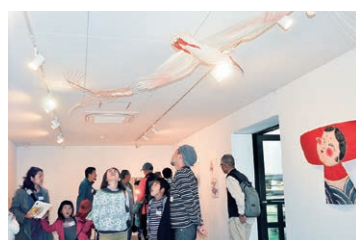
取手校地の工房群の設備とスキルを活用し、さまざまなプロジェクトを実施する藝大ファクトリーラボと連携して、自然の素材を源にゼロからものをつくりだす制作体験プログラム。芋掘りをし、土の塊からつぼが生まれる過程に立ち会い、装飾したつぼで芋を焼いて地域の方にお振る舞いする「つぼやきいも」。櫓の加工から紙漉き、風の成形、自然素材から色の抽出と彩色を体験し、完成した風を空にあげる「大空風」。芸術家が伴走して、じっくり通年で制作しています。

お世話になっている
畑で芋掘り！

参加者が装飾したつぼでお芋がじっくり焼かれます



実験のように煮出した植物を濾して色を抽出



藝大食堂ギャラリーでの多種多様な風の展示



めえ～

芸術家 小沢剛さん

つくる

紙から漉いた風で
風あげ！

版画家 宮寺さんの指導で紙すきの難しさも面白さも体感。完成品を手にしたときの感動もひとしお



次頁、食堂のルーツを語る！

GEIDAI SHOKUDO

食べる、表現に触れる。つくる、しっかり考える。「藝大食堂」では、集まった人の好奇心から活動がはじまり、すこしずつ衣食住のあちこちへと広がります。春夏秋冬、自然と芸術につながる藝大食堂を、ぜひ味わいに来てくださいね。

藝大食堂 | geidaishokudo.com

〒茨城県取手市小文間5000 東京藝術大学取手校地福祉施設内
☎ [ランチ] 11:30-14:00 L.O. [カフェ・売店] 10:00-16:30 L.O.
☎ [定休日] 土日祝・大学の休校日(8-9月と2-3月は長期のお休み)
☎ 050-5248-5571 (営業日の10:00-16:30)



※食堂の運営・施設管理は、TAPの運営事務局であるNPO法人TAPオフィスが東京藝術大学より受託しています。

食
べ
て、
つ
く
る
！
藝
大
食
堂
へ
よ
う
こ
そ
え
体
も
気
持
ち
も
芸
術
も
。Welcome to
GEIDAI SHOKUDO

藝大食堂は、茨城県取手市小文間の丘の上、東京藝術大学取手キャンパスの林のなかにあります。大きく光が入る食堂の窓外には、季節ごと種々の草木がのびのび育ち、さまざまな鳥の声が聞こえるのどかな環境です。食堂前のはらっぱには野外作品の制作に動しむ学生がいたり、陶芸専攻の研究者による野焼きの風景があつたりします。この学生食堂が、取手アートプロジェクト(TAP)による運営に切り替わったのは2017年の夏。TAPの長期プロジェクト《半農半芸》のディレクターを務める岩間賢(いわまさとし)を食堂の統括ディ

レクターに迎えます。とはいえ食堂運営なんて全くのはじめてのこと。右往左往するスタッフを前に岩間が描いたのは、食を中心に自然とつながる「みんなで作る食堂」。テーブルの天板や椅子の座面を張り直す手作業から食堂づくりがはじまっています。リニューアルから2年半の現在、藝大で学ぶ若い芸術家たちの活動を支える食堂運営をベースに、この場所を地域にひらかれた活動拠点として、自由な表現を生み出していくとするプロジェクトも動き出しています。変化する風景を覗きにきませんか。



EAT

食堂・カフェ・売店

食堂のベースとなる「食」は、「学食のレベルじゃない!!」と他大学の先生が叫んだ(というほどの)おいしさ。手間ひまかけた、ほぼ全てが手づくりの日替わりメニューがお待ちしています。ぬか漬け、ドレッシングも自家製。食品ロス・残食率の少なさも自慢です。学外のお客様にご利用いただくと、その収益が学生や芸術文化事業に還元される仕組みです。芸術制作も日常生活も体が資本。食べたものが体力も発想もつくるから、しっかり食べてくださいね！フェアトレードの生豆を使った自家焙煎コーヒーも人気。日替わりのパンと一緒にカフェタイムも楽しめます。



ランチメニューは日替わり定食とオリジナルカレーの2種類 ※3名様以上でのお食事は事前予約のご協力をお願いいたします。



写真左|カフェタイムは有機豆を使った自家焙煎コーヒー 写真中|ランチタイムの風景 写真右|おかわり・お残りLNG、渾身のひと盛り

食べる

Cuisine and Shop

身障者ポニーの会さんの
コップパンを使ったスベ
シャルサンドとコーヒー



←写真左 | 稲500坪での放射線測定。ガイガーカウンター片手に土地の状況を自ら確かめた／写真右 | 初期の《半農半芸》の活動を支えた軽トラック「アーとら」

もう一つは中国での滞在が6年目で終わったこと。向こうに建てたアパートが立ち退きで取り壊されて、5年くらいではたどり着かないんだという感覚はあった。作品つくっていても、1年ではつけれない。爾々つくって積み上げて、振り返ると10年っていうのはあると思うけど。《半農半芸》の「こ」までも、現実のビジョンというよりは、半分「できるのかな」に近かった。最初この話を聞いたとき、「ひとりでもやるものじゃないな」と。

岩間 生きたんですか。岩間 生きたんです。表現者をパートナーとして選ぶとき、この人、という基準はあったんですか。岩間 生きたんです。表現者をパートナーとして選ぶとき、この人、という基準はあったんですか。岩間 生きたんです。表現者をパートナーとして選ぶとき、この人、という基準はあったんですか。

岩間 生きたんです。表現者をパートナーとして選ぶとき、この人、という基準はあったんですか。岩間 生きたんです。表現者をパートナーとして選ぶとき、この人、という基準はあったんですか。岩間 生きたんです。表現者をパートナーとして選ぶとき、この人、という基準はあったんですか。

※1＝芸術家が集まり、有機的な連携を土台に独自の芸術表現や価値の創出、仕組みづくりなどを目指して活動する集団のこと。また、その活動形態。

2020

● 秋にヤギを迎える予定

2019

● TAPの主な事務所機能を「高須ハウス」から「藝大食堂」に移転
● 「耕すプロジェクト」スタート



● 藝大食堂 | 2017ー
東京藝術大学の学生を食で支える学食であるとともに地域の人も利用できる食堂。食を囲む場であり、耕す活動の拠点であり、体験型の企画やイベントなども実施し、多層的な展開を見せつつある。藝大に関わる作家の作品に触れられる場としてギャラリーも併設。

2018

● 取手市により井戸から公共水道に切り替え工事
● 台風で「高須ハウス」の屋根が一部飛ぶ
● 岩間賢がブランドローイング制作（次頁参照）
● 食の記憶と音楽のアートプログラム「みのりランチ」スタート（企画：幅谷真理）
● 藝大ファクトリーラボ連携事業開始
● 東京藝術大学取手校地と連携し《半農半芸》を軸とした人材育成事業実施

2017

● 東京藝術大学より福祉施設運営受託が決定
● 小野寺美穂（企画・デザイン）参画
● 「藝大食堂」プレオープン

2016

● 「高須ハウスから版」発行開始
● 若手作家を支援する
● アーティスト・イン・レジデンス「%（パーセント）」開始
● ひだまりのまちプロジェクトと共催で「ひだまりのマルシェ」スタート

2015

● 和綿とブルーベリーの実験栽培着手
● 高須地区を回る市のコミュニティバスがなくなる
● 拠点の修繕を兼ねた美術作品の恒久設置を開始

2014

● 「TAKASU HOUSE（高須ハウス）」オープン
● TAP事務所を「高須ハウス」に移転



● TAKASU HOUSE | 2013ー
高須ハウス。約200世帯が暮らす取手の東端・高須地域にあった旧農協出張所を改修し、作品制作・展示や、地域調査や農作業、ワークショップができる拠点として活用。同地域の住民や団体と連携し、マルシェの実施や地域の祭りなどに参加している。

2013

● 風景と食設計室ホー（食：鈴木敦夫・燻製、チョウハントオルツばやきいも、塩月洋生（住）tidesign（デザイン）との活動開始
● ARTONE（利根町）と櫓の育成連携開始
● 元農協出張所を「高須ハウス」として改修着手

2012

● 岡博美（染織）、松原東洋（舞踏）との活動開始
● サントリー文化財団研究助成の採択を受け全国の半農半芸に関する事例調査実施

2011

● 東日本大震災、3月予定の公開型企画中止
● 取手市が放射線のホットスポットになる
● 岩間賢《半農半芸》ディレクター就任
● 最初の拠点「稲いな500坪」
● 「ARTOSかもルム」での活動開始



● 稲（いな）500坪 | 2011ー2013
取手の中央部にほど近い遊休農地がはじまりの場所。活動する土地の実験的自力除染と数値測定を進めながら、ピクニックを皮切りに、作物の栽培実験や青空料理教室などを動かし食を囲み、研究会を通じて今何ができるかを探る活動を続けた。

2010

● コアプログラム《半農半芸》が定まる
● 椿昇「RADICAL CARBON」再来（ART2004出展作）

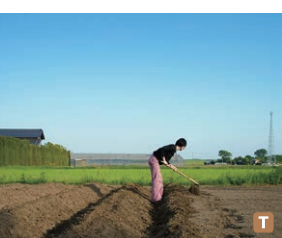
History of Hanno Hangei

半農半芸のあゆみ

2010
2020

10年をかける旅

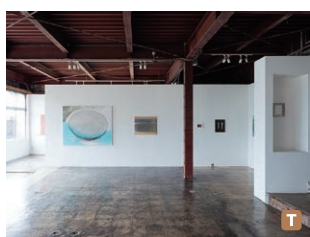
羽原康恵（以下、羽原） 思い起こせば震災後、改めて岩間さんをお迎えして《半農半芸》をはじめににあたって、「10年かけて旅する」というリードをもらったんですよ。



● 綿花の実験栽培のため高須の土地を耕す。現在は若い芸術家が野菜を育てる畑に



● 高須での年に一度のマルシェにはトンデ空の舞踏が登場。毎年心待ちにする人も



● 若い作家たちが地域に関わりながら制作し、その成果を発表する（成田優之展示風景）

ひとりじゃできない

羽原 「ひとりじゃできない」というのも新潟での経験値から？

岩間 東日本大震災での被災地での瓦礫撤去などの経験も影響していると思う。

羽原 震災のときは、石巻の雄鹿半島に入って現場で活動していましたよね。

岩間 震災以降、美術も変化があった。今でこそ耳慣れた、アート・コレクティブ（※1）と同じことだと思っただけ、その当時はそんな言葉はまだなくて。作家が1人でやっていたのも物事はなかなか動かないから集合体をつくらないと、という直感だったかな。

あとアートプロジェクトのあり方として、TAPもそうだけど、作家が地域の人と組んで自分のための作品をつくる、というスタイルは古き良き時代の形じゃないの？っていう思いもあった。ただ作品をつくるんじゃなくて、社会のなかで動いていくには、かつ加速させるには、共同体が必要。

羽原 その共同体をつくるための10年でもあったんですね。表現者をパートナーとして選ぶとき、この人、という基準はあったんですか。

岩間 生きたんです。表現者をパートナーとして選ぶとき、この人、という基準はあったんですか。

岩間 生きたんです。表現者をパートナーとして選ぶとき、この人、という基準はあったんですか。

岩間 生きたんです。表現者をパートナーとして選ぶとき、この人、という基準はあったんですか。

岩間 生きたんです。表現者をパートナーとして選ぶとき、この人、という基準はあったんですか。

岩間 生きたんです。表現者をパートナーとして選ぶとき、この人、という基準はあったんですか。

岩間 生きたんです。表現者をパートナーとして選ぶとき、この人、という基準はあったんですか。

岩間 生きたんです。表現者をパートナーとして選ぶとき、この人、という基準はあったんですか。

岩間 生きたんです。表現者をパートナーとして選ぶとき、この人、という基準はあったんですか。

岩間 生きたんです。表現者をパートナーとして選ぶとき、この人、という基準はあったんですか。

岩間 生きたんです。表現者をパートナーとして選ぶとき、この人、という基準はあったんですか。

岩間 生きたんです。表現者をパートナーとして選ぶとき、この人、という基準はあったんですか。

対談

美術家・TAP《半農半芸》ディレクター

岩間賢

羽原康恵

取手アートプロジェクト実施本部・事務局長

半農半芸
10年の旅

羽原康恵（はばら・やすえ）

アートコーディネーター／NPO法人取手アートプロジェクトオフィス理事・事務局長。1981年高知県生まれ、広島、三重育ち。筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術学専攻（芸術支援学）修了。大学院在学中にTAPインターン、静岡県文化財団勤務を経て、結婚・出産を機に取手に戻り現職。現在は藝大食堂のおばちゃん役も。



岩間賢（いわま・さとし）

美術家／TAP《半農半芸》ディレクター・藝大食堂統括ディレクター。1974年千葉県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了後（ph.D）、文化庁芸術家在外研究員として中国で創作活動。場と人の対話を生み出す作品や舞台、プロジェクトなどを国内外で展開。愛知県立芸術大学美術学部准教授。

https://viva-toride.com/



VIVAパーク。昼間は親子連れや中高年の方たちが、夕方になると学生たちがおしゃべりに集う。ワークショップやトークイベントの会場にもなる。



工作室。メンバー登録で利用可能。初心者向け利用講座も実施予定。



東京藝大オープンアーカイブ。東京藝大の学生が卒業・修了時に制作した作品を展示している。

Art Communicator アートと人を結ぶ アート・コミュニケータ

VIVAでは、市民がアートの世界への案内人として活躍する。日常をわくわくさせる「たいけん」と「まなび」を生み出すべく、講座や実習を経て対話型鑑賞プログラムなどをアテンドしていく。賞プログラムなどをアテンドしていく。※毎年1月頃から新規メンバーを募集予定

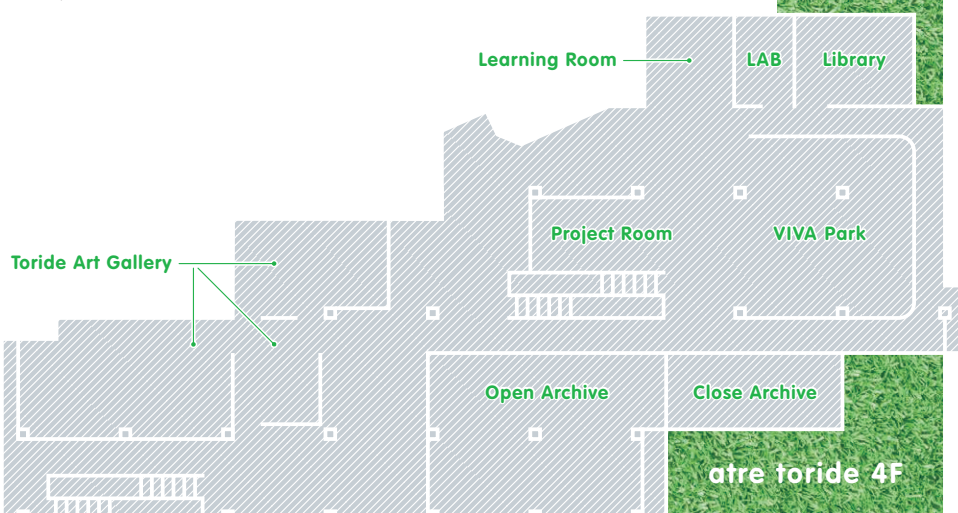
2 019年12月、JR常磐線取手駅に直結した駅ビル「アトレ取手(旧ボックスビル取手)」の4階に「たいけん美じゅつ場(VIVA)」がオープンした。フロア全面リニューアル。公開型作品収蔵庫「東京藝大オープンアーカイブ」、思い思いにすごせる「VIVAパーク」、市民ギャラリー、工作室、旅とアートにまつわるライブラリーなどが設置された文化交流施設である。VIVAのネーミングとロゴは、東京藝術大学美術学部長の日比野克彦氏が手がけている。

TAPは、取手のアートネットワークと市民とのつなぎ手として「プロジェクトルーム」にてプログラムの企画運営をはじめている。通勤通学や買い物の途中にあるこの空間がアートとともにあることで、日常生活からちよつと飛び出したいと思ったときに背中を押してくれる、そういう場所に育てていきたい。



大人から子どもまで
みんな楽しもう

Toride Art Gallery



OPEN!

VIVA

たいけん
美じゅつ場
オープン!

取手駅ビルで
アートとの出会い



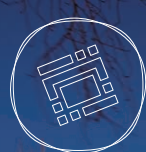
たいけん美じゅつ場

茨城県取手市中央町2-5
アトレ取手4F
[営業時間] 10:00-21:00
※施設毎に営業時間が異なります。



— たいけん美じゅつ場オープン —

— Edit 五十鈴彩子 Photo 加藤甫・中川陽介 —



わが国初の総合イノベーションプラットフォーム
iC! ICI総合センター
Incubation × Cultivation × Innovation

WEEKEND GEIDAI SHOKUDO
ウィークエンド

耕す・すごす・つくる



藝大食堂でアートな週末!

くわしくは **ウィークエンド藝大食堂** でQ検索!

藝大食堂

